

俺の愛から逃げるなよ？冷酷な実兄に強奪され甘く淫らに蕩されるゝ

サ
ン
プ
ル

「お父様……？ 慌ててどうされたのですか？」

「ミリナにはもう婚約者がいてもおかしくない歳だ。……そろそろ婚約の話をしてもいいかね」

「え……？」

「三十キロほど離れた街に、君の婚約者候補がいるんだ。侯爵家であり、私の知り合いのご子息でね。名前はバロムくん。来週こちらに会いに来るそうだよ」

「……え、お兄様はこのことをご存じなのですか？」

「カルドにか？ もちろん相談したよ。『まだ早い』と反対はされたがね……バロムくんが昔から君と婚約したいと言っていたらしいのだよ。仕事の取引もある。どうだね、会ってみる気はないか？」

いずれ来るはずだった定め。

断る理由もない私は、静かに返事をした。

「……分かりました」

静かなダイニングに、カトラリーが皿を叩く軽い音だけが響いていた。

食卓を囲むのは、父上と義母のシフィ様、そして異母兄のカルド兄様。

私の実母は幼い頃に亡くなったため、シフィ様を本当の母親のように慕って育ってきた。

そつとスープを口に運んでいた私に、父上がカルド兄様へ視線を向ける。

「カルド。お前も来月で二十一だ。そろそろ婚約者を決めようと思うのだが……若くして騎士団長を務めるお前に相応しい、美し

く聡明な女性でなくてはな」

「……父上。俺に政略結婚は不要です。相手は自分で探しますの
で、ご心配なく」

淡々と、けれど一言の挟む隙もないほど冷やかな声。

父上は一瞬言葉を詰まらせ、それ以上追及できずに視線を泳がせた。

カルド兄様は昔から完璧だった。幼少期から研鑽を積み、弱冠二十歳で騎士団の頂点に上り詰めたお方。

さらさらと揺れる綺麗な銀髪に、吸い込まれそうになるほどのブルーの瞳。冷徹な美貌に、今日も私は密かに見惚れてしまう。

「ミリナ？ 手が止まっていますわよ。せっかくのスープが冷めてしまいますわ」

「……あ、申し訳ありません」

シフィ様のおっとりとした声に弾かれたように顔を上げると、彼女は楽しそうに微笑んだ。

「ふふ。ミリナくらい可愛らしいお嬢様が現れたら、カルドも少しは気になってくさるかしらね？」

「そんな……お義母様、私なんて……全然、綺麗ではありませんから」

「あらあら、ご謙遜を。こんなに愛らしいのですもの、これからもっと素敵な大人の女性になりますわ。だからこそ、来週の顔合わせが本当に楽しみね」

お風呂から上がり自室に戻って、レストに髪を梳かしてもらった時のこと。

コンコン、と控えめなノック音が室内に響く。

レストの手が止まり、扉を開けると——そこに立っていたのはカルド兄様だった。

「ミリナ……少し、良いか？」

「あ、では、私はこれで失礼いたしますね」

気を利用させたレストが静かに部屋を辞していく。

二人きりになった部屋で、ふと自分の姿に意識が向いた。

レースがあしらわれた薄手の寝巻き姿のままであったことに気づき、途端に肌が熱くなる。

視線を感じて顔を上げると、兄様の綺麗な瞳が一瞬だけ私の胸元へ落ち——そして、何事もなかったかのようにすっと私の目元へ戻された。

「……夜分にすまない」

「あ、いえ……大丈夫です。お気遣い、ありがとうございます」
動揺を隠すように小さく首を振ると、兄様は少しだけ間を置き、静かな声で言葉を紡いだ。

「ミリナ……先程の婚約の話だが、無理をする必要はない——あれは父上が勝手に進めていることだ」

「……あ、でも私はずっと……エルデグラス家のために——」

「お前は、お前のままでいい」

言い切るように言葉を遮られると同時に、あたたかな手がそっと私の頭に触れた。

その手に込められた温度に、胸が跳ねる。

（そんなに綺麗な顔で……優しく撫でないで……）
心臓の音がうるさくて、息がうまく吸えない。

私の緊張を感じ取ったのか、兄様はふっと口元を緩めると、名残惜しそうにスッと手を離れた。

「遅くに失礼した。ゆっくり休むといい……おやすみ」

「……はい。ありがとうございます……おやすみなさいませ、カルド兄様」

——この先の続きは本編で♡